

名詞句の可算性と不可算性の区別 —言語比較の観点から—
(欧米文化研究 14, pp. 33-48, 2007)

吉田 光演

0. 序論¹⁾

可算 (count), 不可算 (mass) という名詞の意味分類は, 英語やドイツ語などの西欧言語ではごく一般的な区別である。可算・不可算の違いは, ①英語の a のような不定冠詞が単数名詞と随伴するか, ②複数形が標示されるか, ③名詞の前に数詞が隣接するかといった形態的・統語的なテストで判断できる。それぞれ可能なものが可算名詞であり, 不可能なものは不可算名詞である。一方, 不可算名詞は, (冠詞など) 限定詞なしの裸形式 (bare NP) のままで主語・目的語などの項として機能する。また, 助数詞や度量詞などの媒介があれば数詞と結合する:

- (1) a. a dog (two) dogs (two) bags eine Tasche Taschen (ドイツ語「カバン」)
b. *a water *a sand *waters *sands *two water *two sands
c. There is wine /*cat in this room. Gold is rare.
d. a glass of wine two grains of sand

他方, 日本語や中国語など, 限定詞が顕在的ではない言語では, (1a-d) のような差異が見られず, ほとんどすべての名詞が不可算名詞と類似したふるまいを示す。

- (2) a. *1 犬 *犬 1 *2 カバン *カバン 2
b. この家にワインがある。机にカバンが置いてある。この町は犬が多い。
c. 1 匹の犬 カバン 2 個 砂 2 粒 1 杯の水

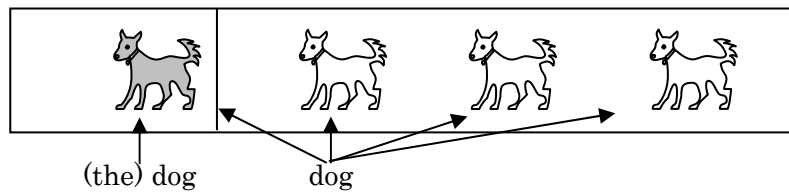
(1)と(2)の比較から一見して帰結することは, 「日本語・中国語タイプの名詞は不可算名詞だ」という推測である。実際, 幾つかの先行研究において同様の主張がなされている (Krifka 1989, Chierchia 1998a)。しかし, この「日本語名詞=不可算名詞」説には実は問題がある。

本稿の目的は, この説に疑問を呈し, 「日本語にも可算・不可算タイプの区別がある」ことを理論的, 実証的に示すことである。それによって, 個別言語を超えた統語と意味 (言語と認知) の間の有機的関連を示す。本稿の構成は次の通りである。1 節で可算・不可算名詞の相違を吟味し, 理論的分析の方向性を提示する。2 節では日本語タイプの名詞=不可算名詞説の根拠を検討する。3 節では日本語タイプの名詞を種 (kind) とする論拠を論じる。4 節では純粹不可算名詞の *water* タイプと *furniture* タイプ (個体的不可算名詞) の相違について論じる。5 節では, 日本語にも個体的不可算名詞があることを主張し, 6 節では, これを日本語母語話者へのアンケートによって具体的に論証する。7 節は本稿の結論である。

1. 可算名詞・不可算名詞の意味的特性

最初に、可算名詞・不可算名詞の相違について考察する。可算名詞は個体 (individual) を指示するために用いられる。しかし、**Dog is barking.*と言えないように、「可算名詞＝個体指示」という単純な等式は成り立たない。単独で個体を指示するのは「北極星」や *Einstein* のような固有名詞である。固有名詞は個体の名前であり、複数形もなく、冠詞と結合することもない。一方、可算名詞は、冠詞のような限定詞なしの単数形ではその範疇に属するどの単数個体にも該当する。従って、可算名詞は個体の集合 (set of individuals) を指示する。

図 1



"dog"は「犬」であるどの個体をも指し、"a dog"のような量化表現によって初めて一つの個体と関係しうる。また、文脈的に十分制限されれば、定冠詞 *the* によって特定個体を指示する。重要なのは図 1 のように、対象に個体としての離散的な境界が認められることである。これは、個体化、原子 (atom)、最小単位 (minimal part) などの概念によって把握される。可算名詞は原子、最小単位をもった個体の集まりを指示する。一方、*water* といった不可算名詞の場合、指示対象は最小単位をもたず、均質的である（どこまで分割しても最小単位が定かでない）。さらに、不可算名詞は、最小単位がないので、どれだけ量を足しても同じ名詞で指示される、即ち、累積的に指示する (cumulative reference)。ある容器の *water* にどれだけ *water* を注ぎ足しても、やはり *water* である (Quine 1960)。他方、犬 1 匹 (*dog*) に、もう 1 匹の犬を付け足すと、それらを指示するには複数形 *dogs* が必要になり、単数 *dog* では指せない。可算名詞の複数形は累積的指示の性質をもつが、ここでは単数形を考える。また、累積的指示とは別に、分割的指示 (divisive reference) という基準もある。不可算名詞で指示される対象物を二分、三分割しても同じ名詞で指示できる (例えば *water*)。しかし、*dog* のような可算名詞の指示対象 (個体) を分割してしまうと、同じ名詞で指示することはできない (Krifka 1989)。

(3) 可算 (count) ⇔ + 個体, + 最小単位, - 累積的指示, - 分割的指示

不可算 (mass) ⇔ - 個体, - 最小単位, + 累積的指示, + 分割的指示

このように見ると、(3) の右側、即ち、物理世界の中の個体・非個体という対象の存在論的あり方が可算・不可算名詞の言語的区別を決定するという分析が可能になる (Bloom 1999)。

しかし、個体性や最小単位の有無は、モノの物理的特性に照らして判断できるかといえ、そう単純ではない。哺乳動物や人間のような対象では、対象の境界を引くことは容易だが、*computer* や *car* といった機械の場合、内部に分離可能な最小単位が認められる (CPU, ハン

ドル等)。事実、英語の *furniture*(家具), *footwear* (はき物), ドイツ語の *Vieh*(家畜)などは、個々の家具, 履物, 家畜のように最小単位は明らかであるのに、冠詞も付かず、複数形もないので不可算名詞である。従って、可算・不可算の基準は存在論的に決まるのではなく、人間のものの見方によって動機づけられているとする認知的分析も成り立つ (Lee 2001)。個性性と結びつく概念として、最小単位のほか、動作主性, 有生性, 機能性 (読書・執筆用家具 = *desk*, 家で使用する家具類の集合体 = *furniture*) などの範疇が設定できるだろう。2)

他方、こうした存在論的・認知的見方とは逆に、可算・不可算の相違は、もっぱら言語内在的な相違に基づくという見方もある。つまり、可算名詞と不可算名詞の区別は、物理特性としての対象の散らばりのあり方にあるのではなく、言語表現としての名詞の側の区別にあるという見方である。この見方の典型がクワイン(Quine 1960)の論である。

(4) To learn 'apple' it is not sufficient to learn how much of what goes on counts as apple; we must learn how much counts as an apple, and how much as another. Such terms possess built-in modes, however arbitrary, of dividing their reference. The contrast lies in the terms and not in the stuff they name. It is not a question of scatter. (Quine 1960: 91)

(4)によれば、対象を *desk* (可算) と呼ぶか, *furniture* (不可算) と呼ぶかはモノの散らばり方でなく、名辞(term)の側にある (可算か不可算名詞)。従って、ある言語において可算・不可算の区別がなければ、個性性も有意味ではないことになる (すべてが均質的物質)。

可算一個体, 不可算一非個体をめぐる上記の議論にはまだ決定的な答えは出ていないが、極端な存在論と極端な言語中心主義には問題が多い。以下に見るように、可算・不可算の対立が一見明確でない言語にまで論を拡大すると、どちらも破綻してしまうからである。

2. 中国語・日本語タイプの名詞＝不可算名詞説

英語やドイツ語などには、可算名詞も不可算名詞もあるが、可算名詞が際立っているという意味で、ここでは「可算名詞言語」と呼ぶ。可算・不可算の区別のない言語で考えられる言語タイプの一つは、「すべての名詞が可算である言語」である。つまり、あらゆる名詞に単数不定冠詞, または *one*, *two* に対応するような数詞を直接に付加できる場合である(**a water*, **two water(s)*)。しかし、そのような言語は知られておらず、存在しないと思われる。他方、中国語・日本語・韓国語のように、可算名詞としての特徴が顕在的でなく、不可算名詞の形態特性・統語特性のみをもつ言語タイプは多数ある(Chierchia 1998a)。

(5) i) 冠詞がない ii) 複数形がない iii) 数詞が直接付かない iv) 類別詞が豊富

日本語のような(5)タイプの言語を「不可算名詞言語」と呼ぼう。可算名詞言語と不可算名詞言語の名詞の解釈に注目すると、両者の関係について、次のような分析が考えられる。第一は、

生成統語論のように、言語タイプに関わらず統語構造の普遍性を仮定し、不可算名詞言語でも限定詞範疇(D: determiner)を設定し、意味的な論理形式 (LF) 段階で可算名詞の存在を認める立場である。しかしこの場合、目に見えない単数空限定詞 ϕ 、複数空限定詞 ϕ 、総称空限定詞 ϕ と、統語論的に厳しく制約されるべき不可視要素を幾つも設定せざるをえない。(6b)(6c)のような空限定詞の素性付与(+sg, +pl)は恣意的ではないのかという疑問も当然生じる。

(6) a. [DP a [+sg] [NP dog]] b. [DP ϕ [+sg] [NP 犬]] c. [DP ϕ [+pl] [NP 犬]]

第2は、不可算名詞言語には統語的には不可算名詞しかないが、意味的には可算・不可算の区別があるとする分析である。名詞句 NP は限定詞 D を投射しないが、名詞句に[+count], [+generic]のような意味素性を加え、意味レベルで個体解釈、総称解釈を保証する(=7)。この場合、意味解釈の妥当性をいかに保証するかが問題となる(統語論と意味論の関係)。

(7) [NP 犬_[+COUNT]が] 吠えている。 → $\exists x$ [Dog(x) & Bark(x)]

[NP 犬_[+GENERIC]は] 賢い。 → G_x [Dog(x) & Clever(x)] (G: 総称演算子)

第3は、不可算名詞言語には統語的にも意味的にも不可算名詞しかないとする説である。「人間」も直接数詞が付かないので、「人間」は個性のない不可算名詞である。Pelletier 1979などで"universal grinder(普遍研磨機)"と名づけられた仮想装置のように、個性をもつ対象物も、当該言語ではすり潰して粉のように均質的塊として捉える。これはクワイン説を拡大すれば当然の帰結だが、可算名詞言語と不可算名詞言語の意味解釈が完全に異なる(個体の犬と、量としての犬)。しかし、(8)のように、日本語でも複数形や数量詞の区別など、可算統語論に近い区別があり、「不可算名詞言語の名詞=不可算名詞」説は受け入れにくい。

(8) 社員たち/*ゴミたち (複数形態) 多数の自動車/*多数の砂(数量詞)

3. 日本語・中国語の名詞=種名詞(kind noun)

「日本語・中国語の名詞=不可算名詞」説の問題は、実在する言語タイプと意味の関連を説明できないことである。一方で可算・不可算の区分をもつ言語があり、他方で不可算タイプしかない言語がある。しかし、可算名詞のみの言語はない。これはなぜか? 言語的区別を重要視する言語内在説ではこの非対称は謎(偶然)である。また、個体・非個体の物理特性の相違が可算・不可算の相違を決めるという存在論的見方にも都合が悪い(では、日本語になぜ可算名詞がないのか)。可算名詞言語と不可算名詞言語の両者の言語的な相違を吸収できるような意味論的対応物があれば、両者は統一的に把握できる。そこで、「日本語タイプ=不可算名詞」説を修正して、中国語・日本語の名詞は統語的には不可算名詞だが、意味的には種(kind)を指示すると主張する論者がいる(Krifka 1995, Chierchia 1998a)。この分析は、(1c)の"Gold is rare"のように、不可算名詞が種として機能することから派生した議論であり、種名詞は限定詞Dを必要

とせず名詞句(NP)のまま項になれるという性質によって、不可算名詞言語の統語的・意味的な特徴を一般的に説明しようとする。この種名詞説の長所は、不可算名詞言語だけでなく、可算名詞言語における不可算名詞（及び複数名詞）の特性も説明できることにある。

元来、英語などの言語の不可算名詞の統語的性質には不可思議な点がある。不可算名詞は、限定詞なしの裸形式で主語にもなり、述部（の一部）にもなることができる。

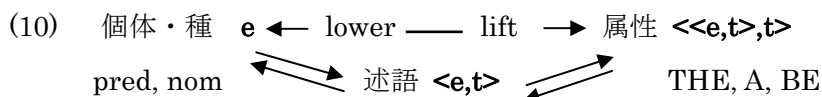
(9) a. Wine is healthy. → Healthy (w) (w=ワインという種: e タイプ)

b. I drank wine yesterday. → ∃x[Wine(x) & Drank(I, x)]

c. Wein ist gesund.(ドイツ語=(9a)) Ich habe gestern Wein getrunken. (=9b)

(9a)の主語wineは特定量のワインでなく、ワインという種全体を複合個体として指示する(eタイプ: e =entity)。他方、(9b)のwineは一定量のwineという部分の解釈しかない。some wineのように限定詞を補う名詞句の解釈では、不可算名詞は述語タイプ(<e,t>タイプ: 個体eの集合)に対応し、指示性をもたない。実際(9b)は、不定量のワインの存在を表す(不定量xのワインが存在し、そのxを私が飲んだ)。ここで、*wine*が述語(predicate)であるというのは、ある量xが「ワインである」という集合(述語)に含まれるという意味論的關係(=Wine(x))を表す。しかし、不可算名詞が述語タイプ(<e,t>)を意味するとすれば、不可算名詞がなぜ裸形式で、(9a)のように個体概念としての種(e)を指示できるのか、簡単には説明できない。

種(個体概念)、述語といった名詞の意味転換については、Partee 1985, Chierchia 1998bのタイプ変換(type-shift)理論が有名である。名詞は個体(e), 述部(<e,t>), モンタギュー流の属性(<<e,t>,t>)などの意味タイプを表し、述語・属性から個体への転換は名詞化変換(nom, lower)であり、個体から述語・属性への転換は述語化(pred, lift)というタイプ変換である。



特に、Chierchia 1998a,b が注目したことは、英語などの言語での不可算名詞と複数可算名詞の共通性、即ち、限定詞なしの裸名詞句の機能である。

(11) a. Dogs are widespread. (種指示) b. Dogs are barking. (不定存在)

e 個体タイプ

<<e,t>,t> 属性タイプ (述語<e,t>の集合)

wineのような不可算名詞も、dogsのような複数可算名詞も、限定詞を要求せずに、裸形式(bare NP)で種を指示する。両者の共通性は、名詞の指示対象に該当するすべての要素を包括する種を複合的個体として一義的に指示できるところにある。つまり、(12)のように、内側にある個々の要素(a, b, c...)を捨象して、外側から一つの種という単位としてまとめる。

(12) 個体としての種 a+b+c [NP dogs] → e [NP wine] → e

Chierchia によれば、(12)の種は、全体として見れば、唯一的個体(e)になっており、種の名

辞(name)に等しいので、*the* などの限定詞なしで(固有名詞と同様に)項になれる。さらに Chierchia は、*furniture* のような個性をもつ不可算名詞もあるので、不可算名詞の外延における「最小単位の不在」は決定的ではないと主張する。即ち、*water* のような質量的な不可算名詞も最小単位が不明瞭(vague)であるだけで、最小単位をもちうる。むしろ、複数名詞との共通性を考慮すれば最小単位を認めるべきである。そうすれば、複数名詞は統語的な複数化によって束(lattice)が形成され、不可算名詞はレキシコンでの複数化で束が作られると統一的に把握できる。可算名詞は、単数形では(13)bのように最小単位である個体 a, b, c の単数集合を表すが、複数形では、a+b, b+c, a+c, a+b+c のような複数個体の集合(束構造)を示す。

$$(13) \text{ a. } \left. \begin{array}{c} \boxed{a+b+c} \\ a+b, b+c, a+c \\ \{a, b, c\} \end{array} \right\} \text{ wine} \quad \text{b. } \left. \begin{array}{c} \boxed{a+b+c} \\ a+b, b+c, a+c \\ \{a, b, c\} \end{array} \right\} \text{ dogs} \\ \text{dog} = \{a, b, c\}$$

wine のような不可算名詞では、(13a)のように単数集合 {a, b, c} も、複数結合 {a+b, b+c, a+c ...} も分離していない(単数と複数の融合)。(13)のどちらも個体集合の意味としては述語タイプ <e,t> (または属性 <<e,t>,t>) を表すが、一番上の最大元(a+b+c)の段階では、種としての個体を指示できる。従って、*wine* も *dogs* も定冠詞の助けを借りずに指示表現になる。

「不可算名詞=種指示」説の利点は2つあると思われる。第1は、種指示が不可算名詞の本来の語義であるとすることによって、英語でも日本語でも、限定詞の不在が説明できる(ちょうど固有名詞と同様に名辞として機能するので)。

$$(14) \text{ a. [DP The [NP dog]] is walking.} \quad \text{b. [NP 犬が]歩いている}$$

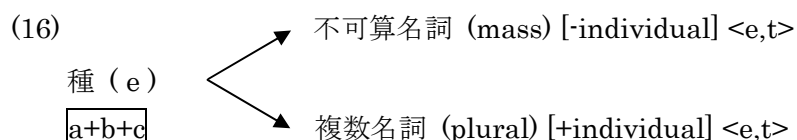
$$\begin{array}{ccc} \downarrow <e,t> \text{ 述語} & & \uparrow <<e,t>,t> \text{ 属性化 (lift)} \\ \downarrow e \text{ 名詞化} & & \uparrow e \text{ 種} \end{array}$$

$$(15) \text{ a. [NP Dogs] are widespread.} \quad \text{b. [NP 犬は]どこにでもいる。}$$

英語では(14a)のように単数可算名詞は、単数個体の集合であり、述語タイプ <e,t> の名詞句 NP はそのままでは項にならず、*the* のような限定詞 D によって初めて項になる。他方、複数可算名詞は上述のように種(e)タイプに変換(lower)できるので、限定詞なしの名詞句 NP によい(=(15a))。日本語の「犬」は(すべての名詞がそうだが)、統語的には不可算名詞に似ているが、(15a)の *dogs* と同様に種を指示するので限定詞は不要である(=(15b))。逆に、(14b)のように「犬」が可算的に(不定数の存在として)解釈されるときは、種から属性 <<e,t>,t> へのタイプ変換(lift)がなされる (e → <<e,t>,t> へ)。このように、個体タイプの種指示ということによって、統語的には単純な名詞句 (bare NP) が項として機能することが説明できる。

第2には、(この点は Chierchia 1998a も、他の文献も述べていないが) 不可算名詞言語の

名詞の本来の意味を種(kind)として把握するなら、それが場合により、(13a)のように不可算名詞として機能することも、(13b)のように複数名詞として機能することも、両方とも予測できるということである。日本語・中国語タイプでも可算・不可算の区別があるという指摘はなされている (Cheng & Sybesma 1999, Watanabe 2006, Hashimoto & Yoshida 2004)。それらの説明はまだ十分ではないが、本稿の分析が正しければ、原理的説明が得られる。



日本語タイプの名詞が不可算的に見えるのは、(16)のようにどの名詞も (裸名詞句で) 種としての個体を指示するからである。しかし、(16)の右のように、純粹不可算名詞タイプ (不可算) と、(単数の集合をも含む) 複数名詞タイプ (個体的) の名詞が含まれているとすればどうだろうか (これ自体は可算名詞言語でも同じ) ? そうすれば、日本語でも種以外の解釈が必要となる文脈では、タイプ変換がなされ、可算・不可算の相違が出てくるのである。

4. 可算的な不可算名詞

前節で述べたように、Chierchia 1998b は、*water* のような純粹不可算タイプと、*furniture* タイプの不可算名詞を区別していない。しかし、言語と認知のレベルでは両者は異なるという研究結果が提起されつつある。Barner & Snedeker 2004 などの研究によれば、英語の母語話者 (子供と大人) は、*mustard*, *ketchup* のような物質的不可算名詞 (substance-mass noun) と、*furniture*, *jewelry* のような個体的不可算名詞を認知的に区別しているという実験結果が出た。自然言語の量化は個体化と関連しており、個体と結びついた可算名詞の場合、対象の個数によって量化されるが、均質的塊である不可算名詞の場合は、量化の単位が欠如している。従って、*more* のような量化詞で指示される対象は、可算名詞では個数の多いもの、不可算名詞では総量の多いものを選ばれるという仮説が成立する。Barner & Snedeker 2004 の実験では、子供も大人も *Who has more shoes?* という問いに対して全員が、小さいが数の多い靴の絵を選び、*Who has more toothpaste?* では少ない量の塊で個数の多い練り歯磨き粉を選んだ者はいなかった。しかし、個体的不可算名詞である *furniture*, *silverware* で、*Who has more silverware?* と質問した場合に、97%の割合で個数の多いものを選んだ。また、*string(s)*, *chocolate(s)*, *paper(s)*, *stone(s)* のように、不可算的性質と可算的性質 (複数化可能) の両方の性質をもつ名詞で同様の実験を行った場合、*Who has more stones?* と可算名詞で質問すると、個数の多い石を選び、*Who has more stone?* と不可算名詞で質問すると、量の大きな石の方を選んだという。この結果から、不可算名詞は一樣ではなく、最小単位をもたない substance-mass noun と、最小

単位(個性性)をもつ *object-mass noun* に分かれること、従って、可算—不可算の区別と、個体—物質(質量)の区別は並行的ではないということが明らかになった。つまり、見かけ(言語的)は不可算だが、認知的には個性性をもち、複数化されうる対象を指示するような不可算名詞タイプが、純粹可算名詞と純粹不可算名詞の間にあるということが示された。

この結果は、可算—不可算統語論と意味の平行性を唱えるクワイン説の否定である。同時に、Chierchia 的な不可算名詞と複数名詞の統一的取り扱いに対する否定でもある(不可算には2つのタイプがある)。ここでは形式化は行わないが、上述の(13)の図式を修正すると、次の(17a)(17b)のようになる。*furniture* のような「個体的不可算名詞」は最小単位をもつが、*wine* のような「質量的不可算名詞」では最小単位が確定できない(Link 1983)。

$$(17) \text{ a. } \text{furniture} = \begin{pmatrix} \boxed{a+b+c} \\ a+b, b+c, a+c \\ \{a, b, c\} \end{pmatrix} \quad \text{b. } \text{wine} = \begin{pmatrix} \boxed{a+b+c} \\ a+b, b+c, a+c \\ a \quad b \quad c \\ a/2 \quad b/2 \quad c/2 \\ \dots\dots\dots \end{pmatrix}$$

wine のような質量的不可算名詞でも、下位部分(portion)による結合は可能だが(*a glass of wine, two bottles of wine*), 計測の単位が変動するため、結合単位は非常に曖昧である。しかし、(17a), (17b)のどちらも、全体和としての種(最大元 $a+b+c$) の概念は明確である(世界中の全ての家具類, 世界中のすべてのワイン)。即ち、両者は、下位レベルでは最小単位の明確さにおいて差があるが、最上位の指示対象として眺めれば等質のものとして把握されるのである。

5. 日本語の可算的不可算名詞の存在

Chierchia 2005 は、中国語のような言語には純粹不可算名詞しかなく、すべての名詞が種を指示し、個体化される場合には(「匹」「人」などの)類別詞が必要で、*furniture* のような「見せかけ不可算名詞」は存在しないと主張する。しかし、筆者は、日本語の名詞には(17a,b)の2つのタイプの区別があると主張したい。具体的には、次の論拠が挙げられる。

- (18) a. 日本語タイプでは純粹な可算名詞はない(単数・複数の区別がない)。
- b. 日本語タイプの名詞は種を指示する(述語タイプの可能性はある)。
- c. 日本語でも個体的不可算名詞と質量的不可算名詞の区別がある。この区別は、個体的不可算名詞が量化に関して可算名詞に類似した特性を示すことで分かる。
- d. 物理対象を指示する名詞の意味論は、個体・質量の区別を言語形式に反映する。

「机」「犬」「学生」のような日本語の名詞は、そのままでは単数個体を指すのか、複数個体を指すのか分からない。これは日本語の名詞が、可算名詞とは違って、数を形態的に組み込んで

おらず、数が未指定であるためである(=18a))。ここで、Chierchia, Krifka に従って、日本語タイプの名詞は基本的に種指示から出発すると仮定しよう (=18b))。これは、種は個体タイプ (=e)であり、統語的にも意味的にも(述語タイプより)単純であることによる。もう一つは、種から出発すると、個体的不可算名詞と質量的不可算名詞の相違が種のレベルで中和され、等質になっている(違いが見えない)という利点がある。日本語母語話者にとって、種指示が優先的であれば、可算・不可算的な相違が意識に上らないのも当然だろう。³⁾しかし、可算的・不可算的な名詞の違いは日本語にも見出される。即ち、日本語にも *furniture* タイプの最小単位をもつ不可算名詞グループが存在する(=18c))。「机」「犬」「学生」といった個性が明確である名詞は、「水」「小麦」などの不可算的名詞と峻別される。これは、結局、個性・最小単位性(離散的な個体)と、質量的な塊の区別を重要と認める人間の認知的特性が、言語形式に反映されたものであるためと考えられる(=18d))。

(18c)の可算・不可算の区別について、次のような対比を見てみよう。

- (19) a. 二三の学生 vs. *二三のご飯 (概数) b. 兵隊 500 vs. *石油 500 (数詞付加)
 c. 24 の瞳 vs. *24 の米 (数詞) d. 一日本人 vs. *一ビール (語形成)
 e. すべての雑誌 vs. *??すべての水 f. 多数の自動車 vs. *多数の鉄 (数量詞)
 g. *多量の自動車 vs. 多量の鉄 h. どの子供 vs. *??どの粉 (疑問詞)
 i. どの本 vs. *どの冊本 j. 学生たち vs. *ワインたち

Chierchiaらは、日本語・中国語が類別詞言語であることを絶対視しているように見える。しかし、日本語では(19a,b,c)のように、類別詞ぬきで数詞と名詞が隣接しうる文脈がある。概数や「100」のような大きな数を付加した場合である。概数は、正確な基数を表すより、「若干の」「多くの」のような修飾語的働きをもつため、類別詞が不要になる。「兵隊 500」のような場合、それぞれの個体を問題にせず、個体和を強調している。いずれにせよ、これは、「石油」のような質量的不可算名詞では不可能である。「24 の瞳」のような数詞+「の」+名詞も例外的だが、これが可能になるのは、個体的不可算名詞に限られる。(生産的ではないが)「一学生」「一日本人」「三姉妹」のような複合名詞での数詞と名詞の結合も、可算的な名詞に限られる(「*一ワイン」)。さらに、「すべての」のような量化表現や、「どの」のような個体を問う疑問詞は類別詞を必要とせず、可算的な名詞だけと結合する。「*すべての冊雑誌」「*学生多数人」のように、類別詞を量化表現に挿入すると非文になるということは決定的である(類別詞が個体化を可能にしている訳ではない)。また、人間を表す名詞と結合しうる複数形態素「たち」は、不可算的な名詞とは相容れない(「*ビールたち」「ネコたち」のような動物の擬人化は可能)。

ここで見た数詞、可算量化詞、疑問詞はいずれも、種ではなく、個々の個体(単数・複数)の存在を前提し、その原子・最小単位の基数を計測するのである。⁴⁾この対比から、日本語名

詞における個体的不可算名詞・純粹不可算名詞の違いは明らかであろう。

6. 日本語母語話者の判断

5節(18c)の主張(日本語にも可算・不可算の区別がある)を検証するため、日本語母語話者37人を対象として、アンケート調査を実施した。その主眼は、「多数の自転車」「多量の自転車」などの表現の容認度を確かめることである。以下がその調査結果である(抄出)。

(20) 調査アンケート(2006年7月実施)

- ・対象：広島大学の学生：1年生25人，3年生12人(合計37名)
- ・第1アンケート(調査項目)：

多数の自転車 多量の自転車 多数のコメ 多量のコメ 多数の酒 多量の酒

(21) 許せない やや許せない 分からない まあ許せる 許せる

多数の自転車	2	0	3	8	24
多量の自転車	5	13	5	10	4
多数のコメ	11	11	3	11	1
多量のコメ	0	0	0	9	28
多数の酒	5	7	3	17	5
多量の酒	0	0	0	3	34

(22) 多数の自転車 86.5% 多量の自転車 37.8%

多数のコメ 32.4% 多量のコメ 100%

多数の酒 59.5% 多量の酒 100% (「許せる」+「まあ許せる」)

(23) 第2アンケート(数・量)

絵を見て判断する

(「多数の石」はどちらの絵を指す?)



	A	B
多数の石	2 (5.4%)	35 (94.6%)
多量の石	15 (40.5%)	22 (59.5%)
多数のビール	1 (2.7%)	35 (94.6%)
多量のビール	36 (97.3%)	2 (5.4%)



第1アンケートでは、「多数の自転車」は、86.5%(37名中32名)が許容し(「許せる」と「まあ許せる」)、許容できない(「許せない」と「やや許せない」と回答した人は5.4%(2名)であった。他方、「多量の自転車」は、37.8%(14名)が許容し、許容できないと回答したのは48.7%(18

名)であった。ここから「自転車」は、基本的に可算名詞的と判断されることが分かる。「多量の自転車」に対して、約3割の許容度があったのは、普遍研磨機的解釈、あるいは言語的強制転換(*coercion*)効果だと思われる(数多くの自転車の集まりを遠くから眺めると塊のように見える)。他方、「多量のコメ」「多量の酒」は100%の許容度であり、予測どおり「コメ」も「酒」も完全に不可算名詞的であると判定された。「多数の酒」「多数のコメ」の表現についても一定程度許容されるのは、下位種(*subkind*)解釈、または容器の数量解釈(「多数のコップの酒」)が可能なためと思われる。いずれにせよ、可算的な「自転車」と、不可算的な「米」「酒」では量化表現の許容度に著しい差が出た。

第2の調査は、Barner & Snedeker 2004の実験と類似のもので、2つの絵を提示して、どちらの表現と対応しているかを尋ねるものである。「多数の石」では、個数の多い石(B)を選択した者が94.6%(35名)と圧倒的に多かった。一方、「多量の石」では、大きい石(A)を選んだものが40.5%(15名)、個数の多い石を選んだものが59.5%(22名)と判断が分かれた。これは英語の *stone, stones* と同様に、硬い固形の「石」が可算的にも、不可算的にも解釈されることを示している。しかし、「多数のビール」ではジョッキの数が多いもの(B)を選んだ者が94.6%(35名)、「多量のビール」では、大きなジョッキの絵(A)を選んだ者が97.3%(36名)と圧倒的な対比を示した。つまり、液体のように均質的な対象の場合、不可算名詞の性格が強く、「多量」という不可算数量詞と親和性が非常に高い。「ビール」が「多数」と結びつく場合には、総量の大きさを示す解釈(大容量のビール)は困難であり、個性性と関係しうる容器(ジョッキ)を計測単位とする傾向が強い。この結果は、可算名詞言語である英語における実験報告(Barner & Snedeker 2004)の結果と類似している(Who has more silverware?について、大人で97%が個体数で判断、Who has more toothpaste では100%が量の大きさで判断)。これは、本稿の主張(日本語名詞にも可算・不可算の相違がある)を裏づける結果である。

7. 結 語

日本語は名詞にも動詞にも数を組み込んでいない。よって、単数・複数形の可算名詞をもたず、不可算名詞しかもたない。しかし、物理対象の認知、言語的な量化、個体の計数は、「個体化」概念と密接に結びついているために、可算性は何らかの方法で言語的に表示されねばならない。ここから、日本語では不可算名詞の内部に、個体的不可算名詞と質量的不可算名詞の相違が生じる。確かに Cheng & Sybesma 1999 も、中国語の名詞句分析を通じて、可算・不可算的名詞の区別を主張した。しかし、Cheng & Sybesma は、① *san bang (de) rou*(3ポンドの肉) vs. *ba tou (*de) niu* (牛8頭) のように、不可算類別詞(度量詞)は「的(*de*)」と共起するが、可算類別詞は「的」と共起しないという類別詞の相違を指摘し、②類別詞の中に可算的類

別詞（「本」「個」「把」など個体名詞を前提し、それを命名するもの）と、不可算的類別詞（「打（ダース）」など計測単位を作り出すもの）の相違があることを主張した。しかし、これらは類別詞に依拠したもので、可算名詞言語と比較可能なものではない。類別詞の意味的区別も必ずしも明白ではない。「個」は「人」など可算的名詞と共起するが、抽象名詞とも共起する。「条」は、魚のような個体（細長いもの）と結びつくが、「绳子（縄）」のような非個体的名詞とも結びつく（「两条绳子」＝縄2本。1本の縄を切ると2本の縄）。一方、本稿の議論は類別詞に依拠せず、英語とも比較可能な量化表現に基づいたものである。

2節で提起した問い（「なぜ可算名詞だけの言語が存在しないのか？」）について再度考えると、次のように答えられる。日本語のように、統語的には不可算名詞だけしかない言語であっても、不可算名詞の中に可算的・不可算的な区別を作り出すことは可能である（英語・ドイツ語でも同じ）。一般に、不可算名詞は個体性に関して未指定であるからである（個体的なものも、非個体的なものも許す。cf. Barner & Snedeker 2004）。一方、可算名詞の範疇の中に、可算的・不可算的な区別を作り出すことはできない、あるいは非常に困難である（最小単位が必要条件であるため）。それゆえ、可算名詞だけの言語は存在しない。このように分析すれば、可算名詞言語と不可算名詞言語は共通の基盤をもつことになるだろう。

注

- 1) 本研究は、科学研究費補助金（基盤C（19520347）「ドイツ語・英語・日本語の数量表現の比較対照研究」吉田光演）による研究助成に基づいている。
- 2) この認知的な見方の一変種として、可算名詞—個体性の関係は明確だが、不可算名詞は（言語的に未指定であるため）言語外の対象・事物についての知識・把握の仕方によって変動するという見方も可能である（Gillon 1996）。
- 3) 日本語名詞には述語的な性格もあるので、日本語名詞＝種指示の仮定は決定的ではなく、述語的意味を出発点にすることも可能である（吉田 2004）。
- 4) 量に作用する数量表現もあるが、それは不可算名詞に限定される（「多量」、much 等）。

参考文献

- Barner, D. & Snedeker, J. 2005. Quantity judgments and individuation: evidence that mass nouns count. *COGNITION* 97, 41-66.
- Bloom, P. 1999. The role of semantics in solving the bootstrapping problem. In: R. Jackendoff et.al. (Eds.), *Language, logic, and concepts*. MA: MIT Press, 285-309.
- Borer, H. 2005. *In Name Only*. Oxford: Oxford Univ. Press.
- Cheng, L.-Sh. & Sybesma, R. 1999. Bare and Not-So-Bare Nouns and the Structure of NP. *Linguistic Inquiry* 30, 509-542.

- Chierchia, G. 1998a. Reference to Kinds across Languages. *Natural Language Semantics* 6, 339–405.
- Chierchia, G. 1998b. Plurality of Mass Nouns and the Notion of “Semantic Parameter”. In: Susan Rothstein, ed., *Events and Grammar*. Dordrecht: Kluwer, 53–103.
- Chierchia, G. 2005. *Mass Nouns, Number Marking and Semantic Variation*. Ms. Talk at University of Massachusetts.
- Gillon, B. 1996. The lexical semantics for English count and mass nouns. *Linguistics and Philosophy* 15, 597-640.
- Hashimoto, M. & Yoshida, M. 2004. Zur Semantik der Pluralischen Nominalphrasen im Japanischen. *Neue Beiträge zur Germanistik* 3, (ed.) JGG (Japanische Gesellschaft für Germanistik), 108-120.
- Jespersen, O. 1924 *The Philosophy of Grammar*. London: Allen and Unwin. (邦訳「文法の原理」, 安藤貞雄 訳. 岩波文庫)
- Krifka, M. 1989. *Nominalreferenz und Zeitkonstitution*. München: Wilhelm Fink.
- Krifka, M. 1995. Common Nouns: A Contrastive Analysis of Chinese and English. In: Gregory N. Carlson and Francis Jeffrey Pelletier, eds., *The Generic Book*, Chicago: The University of Chicago Press, 398–411.
- Lee, D. 2001. *Cognitive Linguistics: An Introduction*, Oxford: Oxford Univ. Press.
- Link, G. 1983. The Logical Analysis of Plurals and Mass Terms: A Lattice-theoretical Approach. R. Bäuerle, C. Schwarze & A. von Stechow (eds.). *Meaning, Use, and Interpretation of Language*. Berlin: de Gruyter, 302-323.
- Partee, B. 1986. Noun Phrase Interpretation and Type-shifting Principles. In: J. Groenendijk et.al. (Eds.) *Studies in Discourse Representation Theory and the Theory of Generalized Quantifiers*, 115-143.
- Pelletier, F.J. 1979. Non-Singular Reference. In: F.J. Pelletier (Ed.). *Mass Terms: Some Philosophical Problems*. Dordrecht et.al.: Reidel.
- Quine, W.V.O. 1960. *Word and Object*. Cambridge, MA: MIT Press.
- 吉田光演. 2004. 総称文における日本語名詞句の種指示について. 『言語文化研究』30. (広島大学), 25-55.
- 吉田光演. 2005. 日本語の助数詞と数範疇の考察. 『言語文化研究』31. (広島大学), 127-158.
- Yoshida, M. 2006. Klassifikatoren im Japanischen und im Deutschen - eine kontrastive Analyse, *Neue Beiträge zur Germanistik* Band 5/Heft 3 (JGG), 29-46.
- Watanabe, A. 2006. Functional Projections of Nominals in Japanese: Syntax of Classifiers. *Natural Language and Linguistic Theory* 24, 241-306.

Count/Mass Distinction in Japanese Nouns: A Contrastive Approach

YOSHIDA Mitsunobu

It is widely assumed that nouns in Chinese/Japanese-type languages are mass nouns because they lack plural morphemes and indefinite articles (Chierchia 1998). In this paper, I disagree with this view and claim that Japanese also makes a distinction between count and mass by showing that the distinction manifests in numeral-noun combinations ("heitai hyaku": 100 soldiers vs. "*sekiyu hyaku": *100 oils) and quantificational expressions, e.g. "tasuu" ("tasuu-no kuruma": many cars vs. "*tasuu-no tetsu": *many iron).

Many philosophers and linguists have discussed the question of whether the count/mass distinction is derived semantically or syntactically, i.e. whether it is determined by the ontology (individual/object \rightarrow count; stuff \rightarrow mass) or by language specific forms (count \rightarrow individual/object; mass \rightarrow stuff). If it were true that Japanese has only mass nouns then it would be just a mysterious coincidence that there are languages with mass nouns only but there is no language that has only count nouns. This fact suggests that there must be common features between languages with a count/mass distinction and ones without such a distinction. Specifically, some sort of "mass" nouns in the second type language indicate the properties of "count" nouns, i.e. the ones of *object* mass nouns like "furniture" or "footwear" which contain their minimal parts although they are classified as mass nouns. Obviously, Japanese nouns do not have a singular/plural distinction. Therefore this language cannot have genuine count nouns. Japanese nouns start from kinds of objects which semantically correspond to entities, and are freely type-shifted to predicate types, e.g. substance mass nouns like "mizu (water)" or object mass nouns like "inu" (dog(s)) which behave as object mass nouns in English. I argue that this distinction is a reflection of the general cognitive property that distinguishes individual items which have their minimal part as a counting basis for nominal reference from non-individual mass items which lack a minimal part.